

「税金を納める誇り」

福岡市立高宮中学校

橋口 愛美

2011年3月11日、東日本大震災は日本中に衝撃を与えた。六歳だった私はそのとき山口から福岡に引っ越す前で、友達の家でお別れ会をしてもらっていた。大人たちが、テレビから流れてくる震災の映像に、ただただ驚き呆然としていたのを覚えている。私たちは幼なすぎてよくわからなかったが、車がまるでミニカーのように渦を巻いた津波に流されていく光景は、強く記憶に残っている。

私は小学生のとき、兄の通う道場の取り組みに参加し、東日本大震災の復興の募金活動を行ったことがある。たくさんの人が通る博多駅の前で、手作りの募金箱を首に下げ、横に並ぶ年上の子たちと一緒に「募金よろしくお願いします！」と大きな声で呼びかけた。通る人が募金箱にお金を入れてくれると嬉しくて、集まった募金が復興の役に立つのだと思うと何だか誇らしかった。

税金も、同じ役割を果たしてくれる。私は最近、東日本大震災の復興のための「復興特別税」というものがあることを知った。「復興特別税」は、東日本大震災からの復興に必要な財源を確保するための特別措置として創設された税の総称である。被災地の復興住宅の建設や、がれきの処理、学校の復旧など被災者の支援に役立っているそうだ。そのおかげで、がれきだらけだった場所が整備され、被災地は活気を取り戻しつつある。北海道から沖縄まで、たくさんの人が払った税金が、被災地の復旧に大いに役立っている。誰かの払った税金が、遠く離れた地で誰かの役に立つのだ。

私も、税金の恩恵を受けている。家を出れば綺麗に整備された道路を歩いて、自由に遊べる公園がある。マンション内のごみ捨て場にごみを置いていけば、夜のうちに回収してくれる。学校では、わかりやすい教科書を無償で使って授業が受けられる。これらのことは、税金が無ければできないことであり、日本のどこかに住んでいる人たちの払った税金のおかげで、私はこんなに幸せな生活を送ることができている。そして、私の払った税金も、きっとどこかで誰かの役に立っている。

今年の十月に、消費税率がいよいよ十パーセントに上がる。増税に対して喜ぶ声はあまり聞かない。私のクラスでも、この税の作文の宿題が出されたとき、「十パーセントは嫌だ。」という声が多く聞こえた。しかし、税率が上がる分、メリットもあるはずだ。みんなの払った税金が、みんなの生活を良くするために、そして未来のために使われる。将来私は、自分の払った税金が誰かの役に立つのを誇りに思える立派な納税者になりたい。